

## 27年度版教科書つれづれ 6 「動いて、考えて、また動く」(光村図書・小学4年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「動いて、考えて、また動く」は光村図書・小学校4年(上)の説明文である。陸上400メートル走の選手であった高野進氏の文章で、高野氏が走り方を工夫してきた経験をもとに書かれている。この教材は23年度版ではじめて収録されたと記憶している。

23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)での文章の違いは、一ヶ所である(後述)。それと、文章と関連させた図が変わっている。文章の下に四つの絵があるのだが、旧版では文章のどの表現と対応するのかが明示されていなかった。新版では「図1」～「図4」と番号が付けられ、文章表現との対応が明示されるようになっている。この点では、わかりやすくなったといえる。

はじめにこの文章の構成について見ておく。

前文 1段落 問題提示

本文 2～6段落

2段落 走り方への二つのぎもん

3～4段落 一つ目のぎもんへの答え

5段落 二つ目のぎもんへの答え

6段落 うでのふり

7段落 経験のまとめ

後文 8段落

\*説明的文章の構成は、低学年では「はじめ—中—おわり」、中学年からは「前文—本文—後文」と考えている。

1段落で筆者は、「運動でも勉強でも、「まず動く、そして考える」ことが大切です。」と述べる。これは8段落でもう一度繰り返されているのだが、筆者の結論といってよいし、この文章の問題提示でもある。そして、「最高の走り方を目ざして取り組んできた長年の経験から、そのように考えるようになりました」とのべて2段落から具体的に筆者の経験を述べていく。

後文に関しては、8段落と考えるが、7～8段落を後文とする考え方も出てくる可能性がある。7段落は「このように」ではじまっており、まとめている感じが強いのである。もちろん「このように」が出ているから後文といった単純なものではない。しかし、「このように、いろいろためしながら、自分に合ったあしの動かし方や、うでのふり方を考えました」という文から、3～6段落の内容を受けてのまとめといえる。その意味では、「このように」はこの文章の一部のまとめというよりは、走り方に対する筆者の長年の経験を受けていると考えたほうがよい。そうすると、7段落を「まとめ」として後文に入れる考え方も、一概には否定出来ないと思う(この点に関しては後述)。

ただ、先に示した構成と私が考えたのは、2～7段落は走り方に関わって述べているのに対し、1段落と8段落はより一般化して述べていると考えたからである。「運動でも勉強でも」とあるよ

うに、単に走り方だけのこととして筆者は述べようとしていないのである。

さて、文章の変更があるのは5段落である。新版は次のようになっている。

①もう一つの「あしを思い切り後ろにける」ことについては、それからしばらくして、べつの発見をしました。②走るときは、ついあしを後ろにけて、その力で前に進もうとしてしまいます(図3)。③しかし、これではあしが後ろにのこってしまい、そのあしを前にもってくる分のむだが生じます。④あしを後ろにけるのではなく、体の下にしぜんに下ろしていく感じで走るとよいのです(図4)。⑤忍者がびたあつと下り坂をかけ下りていくようなイメージで走ると、体のむだな動きがなくなり、すうっと進んでいきます。

\*①②③…は加藤が説明のために付した番号

旧版は図の番号がなく、次のようになっている(混乱を避けるために、文番号は新版で用いたものをそのまま用いる)。

①もう一つの「あしを思い切り後ろにける」ことについては、それからしばらくして、べつの発見をしました。④あしを後ろにけるのではなく、体の下にしぜんに下ろしていく感じで走るとよいのです。②走るときは、ついあしを後ろにけて、その力で前に進もうとしてしまいます。③しかし、これではあしが後ろにのこってしまい、そのあしを前にもってくる分のむだが生じます。⑤忍者がびたあつと下り坂をかけ下りていくようなイメージで走ると、体のむだな動きがなくなり、すうっと進んでいきます。

見て分かるように、①文の後に④文が来ていた。④文の位置が、旧版では①文の直後にあったのである。それが、新版では後ろの方に移動した。

旧版では、④文の理由を、その後の②③文が述べる。「べつの発見」を先に示し、その後に理由を述べるという書き方になっていた。

それが新版では、「あしを思い切り後ろにける」ことの問題点を先に述べた上で、「べつの発見」を述べている。

旧版と新版の違いは、一つの文がどの位置におさまるかの微妙な違いといえる。そしてその違いは、さほど大きくないようにも見える。

「Aである。なぜならBだから」とするか「Bだから、Aである。」とするか、どちらが優れているとは単純に決められる問題ではない。Bで述べることの量が多い場合、「Aである。なぜならBだから」という述べ方のほうが、一般的にいつてわかりやすい述べ方とはいえる。先に結果(結論)を示すことは、読み手にとって方向性がわかるので、安心して文章をたどっていけるからである。ただ、この場合、Bに相当する箇所の量がさほど多いわけでもない。

なぜ新版では、④文を後ろに持ってきたのだろうか。その鍵は、最後の⑤文にある。

⑤忍者がびたあつと下り坂をかけ下りていくようなイメージで走ると、体のむだな動きがなくなり、すうっと進んでいきます。

この文は、④文で述べている走り方を比喩的に説明した文である。旧版では、④文を先に述べていたため、④文と⑤文が離れていた。新版は、④文を後に持ってきたために、④文⑤文が続くことになった。その結果、④文で述べたことを、⑤文の比喩的な説明でもう一度繰り返して説明するという点がよりはっきりした。そのことで、④文の理解がより深まると考えたのであろう。

このように考えると、新版での改訂で少し良くなったといえるのかもしれない。ただ、私には⑤文の比喻が今ひとつピタッとこない。分かったようでよく分からない表現になっているように思えるのだが、どうだろうか。⑤文の表現にもう一工夫ほしいと思うのは私だけだろうか。

「動いて、考えて、また動く」の直前には、「大きな力を出す」という導入教材が配置されている。これは旧版でも新版でも同じである。新版では「大きな力を出す」の文章の上に「はじめ—中—終わり」と文章構成が明示してある。つまり、「大きな力を出す」で文章構成を確認し、それを次の「動いて、考えて、また動く」でも読み取るようにと、教材の配置がなされている。

光村図書のこのような試みは、文章構成を読み取ることを課題として明確に示している点で評価できる。

ただ、「大きな力を出す」の「終わり」は、以下のように書かれている。

このように、一人で力を出すときも、人と力を合わせるときも、呼吸を意識することで、筋肉は、より大きな力を出すことができます。呼吸と筋肉は、深い関係があるのです。

「終わり」が「このように」から始まっているのである。前述したように、「このように」で始まるからといって「終わり」になるとは限らない。しかし、導入教材では「このように」で始まる段落が「終わり」になるようにしておいて、その次に取り組む教材では「このように」で始まる段落が「終わり」にならないというのではどうだろうか？子どもたちは、混乱しないだろうか。

私は、「大きな力を出す」の7段落8段落の書かれ方に関わっては、もう少し配慮があってもよかったと考えている。とはいえ、現場の先生方は、この教科書で実践をされるわけだから、言いつばなしではなく、現実的な対応にも触れておこう。

構成を読む段階において、教師は7段落から「終わり」になるという意見が子どもたちから出てくる可能性を予想しておくことが必要である。

その上で、「終わり」が7段落からなのか、8段落だけなのか、二通りの意見が出てきたら、その理由を出しあい、話し合わせていけばよい。

その際のポイントは

7段落は、2段落と対応している

8段落は、1段落と対応している

この二点を子どもたちが見つけられるようにしていくことである。

そこをきちんと読み取ることができれば、構成の読みとりとしては十分である。最終的に「終わり」を7段落からとするか、8段落だけとするかは、さほど重要ではない（もし、子どもたちの意見が圧倒的に7段落からを「終わり」にするというものであれば、それでもよいだろう）。

構成の読みとりは、構成を決めることに一番の眼目があるのではない。「はじめ—中—終わり」（前文—本文—後文）というものさしを使って文章の組み立てを読み解くことにあるのだから。